

学会賞報告

2019年度アメリカ経済史学会賞（鈴木圭介賞）の選考結果について

2019年度アメリカ経済史学会賞（鈴木圭介賞）に対して推薦のあった業績は、萩原伸次郎著『世界経済危機と「資本論」』（新日本出版社、2018年1月）のみであった。選考委員会は、慎重審議の結果、全員一致して当該業績はアメリカ経済史学会（鈴木圭介）賞の授与に値すると判断した。理由は以下の通りである。

本書の構成は以下の通りである。

はじめに

第1章 バックス・ブリタニカと経済危機

第2章 戦間期における世界恐慌

第3章 バックス・アメリカーナと金融危機の鎮静化

第4章 新自由主義的システムの形成と経済危機

第5章 新自由主義的景気循環の論理

第6章 世界経済危機と『資本論』の論理

第7章 アメリカの経済危機対策

むすびに

つまり、バックス・ブリタニカの時代の経済危機、戦間期の世界恐慌、戦後ニューディール体制（ケインズのシステム）下の経済恐慌それぞれに1つの章を割り当て、新自由主義的システム下の経済危機に対しては第4章から第7章までの4つの章を割り当てた。現代の世界経済危機をどのような視点で理解するかが著者の最大の関心事であることはこの章別構成からも窺い知ることができる。

本書の基本モチーフは、現代の経済危機を論じる際にもK・マルクスの『資本論』の規定は有効であるということであり、著者の言葉を借りれば、「本書は、マルクスの経済危機論を現代的観点から再検討し、19世紀バックス・ブリタニカの時代からバックス・アメリカーナの時期を経て今日に至るまで、その歴史的段階で引き起こされた注目すべき経済恐慌について、マルクス『資本論』の論理を駆使して分析し、その古典としての積極的意義を再びよみがえらせることを目的としている」（7-8頁）。また、別の箇所では「マルクスが『資本論』で議論した経済危機の本質的规定は、今日においても依然として生きているといえるだろう」（348頁）となる。

本書の内容は、書名から受けるイメージとは異なり、現代アメリカ資本主義分析である。著者は論文「アメリカ資本主義と貨幣恐慌（1929-33年）」を1976年に発表して以来、大恐慌、1958年恐慌、ドル危機から金融自由化以降の金融危機、リーマンショックに帰結した国際経済危機に焦点を当てた多数の論考を発表してきた。本書はこうした研究活動の集大成である。

分析の中心は1929年の大恐慌に至る周期的・循環的な恐慌を克服し、「大金融業者と株式仲買人たち」の力を封じ込めるために構築された戦後の「ケインズの国際金融システム」の形成と崩壊、「新自由主義的国際金融システム」への転換とそのもとの経済危機の発生メカニズムに置かれる。壮大な問題意識を出発点とし、一貫した視角で経済危機の歴史的变化を分析した。

大恐慌に至る信用膨張、信用主義から重金主義への転換を明らかにし、大恐慌の実態、戦後における金融の封じ込めと、ニクソン政権以降の金融勢力の復活、そこからリーマンショックにつながっていく経緯を通史的に丁寧に描いている。それにより、大恐慌の時代と、ニクソン以降の現代において金融危機が生じる構造があり、その間の第二次世界大戦後の時期には、金融機関の抑制、金融政策より財政政策が優位に置かれたことなどから、金融危機が発生しない構造があったことを明らかにしている。つまり、本書は大恐慌の時代と、戦後の時代、ニクソン以降の時期を対比させることで、それぞれの時代の特徴と、戦後の金融を抑え込んだ時代の独自性を浮き彫りにしている。

また、個別の論点でも興味深い指摘がなされている。例えば、大恐慌の時代において、信用膨張とその破綻の影響については、平板な分析ではなく、産業や地域ごと、企業規模によって影響が異なることを明らかにしている。また、ケインズ政策の時代から新自由主義的政策の時代への転換が、多国籍企業の本格的な展開による、海外資本投資の問題から発生したことについても指摘されている。特に、この時期に、労働側と多国籍企業化した企業側との合意が崩れることで、戦後のケインズ政策を支えたニューディール連合も崩壊したことが描かれている。

他方で、一貫した分析視角の反面、それぞれの時代の経済危機の原因や発生メカニズムに関する先行研究や論争がほとんど検討されていないため、一見すると本書の学術的意義は伝わりにくくなっている。また、用語としての「経済恐慌」と「経済危機」の使い分けについて、本書12頁注3で「本書において、『危機』と『恐慌』との表現を意識的に使い分けているわけではない。英語表記だといずれもcrisisであることは断るまでもないことである」とあるが、やはりわざわざ現代を扱う場合、世界経済恐慌と言わず、世界経済危機（本書の書名でもある）と表現していることの説明はあってもよかったのではないだろうか。しかし、これらの2点は本書の理論的・実証的意義を損なうものではなく、むしろ、今後の議論を通じてさらに深められるべき問題であると思われる。

以上のように、本書は大恐慌以降のアメリカの経済恐慌と金融危機との関連、時代ごとの推移等、重要な考察がなされている。その点で、選考委員会は、本書はアメリカ経済史学会（鈴木圭介）賞にふさわしい著作であると判断した。

選考委員長 富澤 修身
委員 須藤 功
委員 中島 醸
委員 藤木 剛康